「登位加高台神社」の記録

「高台神社」は、道道7号北見常呂線・登東部付近の3号峠西側高台にある小さな神社で、端野町と常呂町の境界にあり、常呂町登東部と端野町北登1班の住民を氏子としていました。
高台神社の歴史は昭和14年（1939年）に始まり、平成24年（2012年）に閉じていますが、社殿と社殿を覆う建屋は令和4年（2022年）の現在も残っています。

今回、残っている資料と氏子だった人たちの証言を元に、高台神社の特徴や歩みを地域の大切な財産として末永く残すため、以下に記録しました。

1. 高台神社がある地域の特異性

高台神社は、常呂町登東部と端野町北登1班の住民を氏子としており、平成18年（2006年）の北見・端野・常呂・留辺蘂の1市3町の合併前は、2つの行政区をまたぐ特異な神社でした。
この特異性は、この地域の歴史が要因となっています。元々、登と北登の旧地名は「登位加（といか）」で端野村に所属していましたが、大正15年（1926年）の村境査定によって、登位加の一部が常呂村に編入し、登位加は常呂村と端野村に分かれました。
その後、端野村が北海道告示（昭和13年3月5日）によって字名地番改正を行い、端野側の登位加は「北登（ほくと）」になり、同様に常呂村も北海道告示（昭和16年10月25日）によって同年11月10日に字名地番改正を行い、常呂側の登位加は「登（のぼり）」となり、登位加の地名はなくなりました。

「登位加」という地名はアイヌ語由来で、『常呂町百年史』の山田秀三・村崎恭子「常呂町のアイヌ語地名調査」には、登位加（トイカ）を「ポンクマ川上流から隣りの端野町にかけての旧地名。語義不詳。トイカなら「地面」、トイ・カ「畠の・上」、あるいはト・イカ「沼・溢れる（あるいは越える）」などなどに聞えるがまったく見当がつかない。現在は常呂町側は登、端野町側は北登である。端野町側の登位加川から出た名か」と説明しています。
また、『ところ文庫14　常呂町の昔話』（常呂町郷土研究同好会）の「日吉の話」では、上記の山田秀三氏が遠藤清光（明治40年生まれ　当時76歳）に聞き取りした中に、次の箇所があります。（昭和58年聞き取り）

山田:…向こうに「登」というところがありますね？
遠藤:トイカですね。
山田:そうです。アイヌの人は少しはいたんですかね？
遠藤:アイヌ人はいなかった。アイヌはこの上ですね。
山田:トイカというのはねぇ。「畑の上」という意味ですから、アイヌもいたんじゃないかと…。
遠藤:元はあそこはカシワなんかがたいして生えてた。畑はなかったね。

＊注:茂内義雄さんが『さいはてのふだん記　90号』（ふだん記と自分史・さいはてグループ編）に寄稿した「アイヌ語地名〈トイカ〉」には、上記2つの資料を含め、こ

の地名に関して調べたことや論考、そして高台神社に関する思い出・記録がたっぷり綴られているのでご一読を。
＊注:登東部を含め、登地区全体の地形は起伏が多く、平野部から見ると高い位置にあるので、アイヌ語の解釈としては〈地形〉から付いた可能性があります。

2. 高台神社の建立

高台神社・社殿の建立は昭和14年（1939年）で、氏子となっている人たちの家々から見える地域の高台にあります。高台神社の名称に関する由来の記録はありませんが、『北登開拓記念碑建立　記念誌』には高台神社のある場所が〈通称・高台〉と呼ばれていたことに触れる文があり、「高台にある地域の神社」が〈名は体を表す〉のとおりだったことが窺えます。

大工は、山中金五郎棟梁で、北見市仁頃にあるハッカ御殿を建てたことでも知られています。（注:ハッカ御殿は3年の年月をかけ、昭和12年に完成）

高台神社建立時の記念写真には、社殿壁面を覆う神社幕に「昭和14年吉日　川森房之助」の文字があり、建設年、幕の寄贈者が特定できます。（注:神紋は川森家の家紋と思われる「丸に五七の桐」）

また、写真に写っている人たちは、現在の登東部と北登第1班の人たちなので、2つの地域の人たちが共同で建てたことが明らかです。

川森正雄　川森房之助　加藤　　茂内福五郎　古田　今野
田中千松　前北一郎　　大森　前北季春
ハルオ・テルヨシ

■写真:右

＊社殿建立時に行った最初の神社祭を記念して撮った写真と思われます。

＊国旗と掲揚ポール・奉納提灯・お供えを載せた三宝などが見えます。

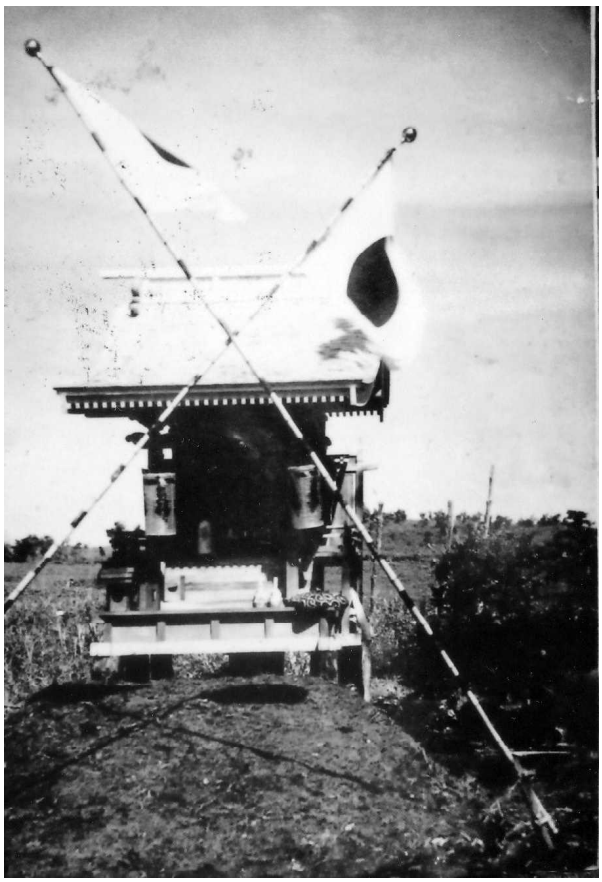
＊社殿の寸法は、脚部分を除き、台座が1.8m四方、台座から屋根までの高さは約3.6m、屋根のひさしの正面幅は約2.1m。

＊現存する社殿には神社建築にふさわしい細工が随所に施され、地域住民にとって小さいながら誇らしい神社だったことが容易に推測できます。

＊祭神は「天照皇大神」(昭和45年に氏子一同が奉納した幟に「天照皇大神」の文字あり)

注:留辺蘂神社・北登神社・端野神社・常呂神社も同じ「天照皇大神:あまてらすすめおおかみ」。

登神社は「常呂町史」で「天照大神」と表記している。



3.高台神社建立の意義

登東部を含む登地区の神社は、『常呂町史』では昭和3年5月(1927年)に「登165番地に社殿を造営し、天照大神を奉上、登神社と称号」したと記録しています。ただし、この時は字名地番改正前だったので、登神社ではなく「登位加神社」であったと思われます。

一方、北登第1班を含む北登地区では、『端野町史』によると、「大正時代初期　現北登地区の中心部に氏神を祀る祠建立「登位加神社」の称号」とあり、「昭和15年(1940年)、紀元2600年記念として旧祠跡に北登神社を建立」したとの記述があります。

現在、高台神社建立の経緯を知る人、聞いたことがある人がいない中、ここから先は少し推測を交えて文を進めます。

行政区を異にする登・北登両地区の「登神社」と「北登神社」がありながら、それとは別に「高台神社」を建立し、地域の神社として祀ったのは、北登第1班と登東部が地続きで、行政区を越えた日常的かつ農作業を通してのつきあいがあり、同じ地域で生活する地縁で結ばれた絆の感覚があったからと考えられます。

この行政区の境界にあり、地続きの地縁で結ばれた人たちの関係が、公的な「登神社」「北登神社」とは別に、氏子各戸を見下ろす地域の神社として高台に建立したことには大きな意味・意義があったと想像できます。

もう一つ、昭和10年代のこの地域はどちらも中心部からは遠く、道路事情を考えると「登神社」「北登神社」ともに縁遠い存在だったことも高台神社を必要とする地域の思いにつながったのかもしれません。

反面、この地域性・神社建立の特異性によって、旧常呂町・旧端野町どちらの歴史にも記録されなかったという事実は残念なことです。

4. 現存する高台神社社殿と建屋から分かること

令和4年6月26日（2022年）、茂内義雄（札幌市在住）と加藤孝（元常呂図書館司書）が、現存する高台神社社殿を収納している建屋の内部確認調査を行いました。

茂内氏は生家が登東部にあり、現在も春から秋にかけて生家と周辺の手入れのために年数回に分けて札幌市から生家を訪れ、滞在しています。

また、茂内氏は、日吉・吉野・登地区の出身者による「さっぽろ日・吉・登会」会報の発行を長年続けたり、「さいはてのふだん記」（ふだん記と自分史・さいはてグループ）を通して自身が調べた地域の歴史を発表し、ふるさとを愛する郷土史研究家です。

今回は、生まれ育った地域にありながら外部の人たちにはまったく知られていない「高台神社」の現状がどうなっているのか、神社の歴史を知る手がかりがないのか確認する作業を行いました。（注:10月23日にも再度行っています）

その結果、次のことが分かり、発見もありました。

①建屋

建屋は社殿が風雨にさらされて老朽化することを防ぐために社殿を囲い、神社祭と懇親会を快適に行うために畳を敷き、暖を取るためのストーブを置き、催事用具を収納できる集会機能を兼ねたものとして建てたと思われます。

建物全体は木造、屋根はトタン葺きで、外観の老朽化はさほど感じられませんが、内部は一部天井板が落ち、最後の神社祭（平成24年）から10年を経てそれなりのホコリ、汚れがあります。ただ、床などを含め腐食はありません。

建設に当たっては、入り口の間口が狭く、社殿を入れるだけの幅がないので、土台・床張り、柱などの骨組みを立てた後に社殿を入れ、その後、壁・屋根を仕上げたと考えられます。

建屋の建設に関する記録や証言がないので、正確な建設年は特定できませんが、いくつかの資料から推測することができます。

まず、昭和33年（1958年）の創立20周年の記念写真は建屋がありません。その後、昭和52年10月（1977年）の航空写真（国土地理院所蔵）には、樹木に囲まれた神社敷地の中に建屋の屋根の一部を確認できます。

また、昭和45年（1970年）製作の幟（のぼり）が創立30周年記念だとすると、この前後に建てた可能性があります。

昭和30年代中頃が登地区では一番戸数・人口が多かった時代です。それは北登地区でも同様と考えられます。その頃に集会機能を備え、かつ社殿の老朽化を防ぐ建屋の建設を協議し、年月をかけて寄付を集め創立30周年をお祝いしたと考えても不思議はありません。多額の出費を伴う地域の重要な決めごとには、それなりの理由と時間が必要です。

②社殿

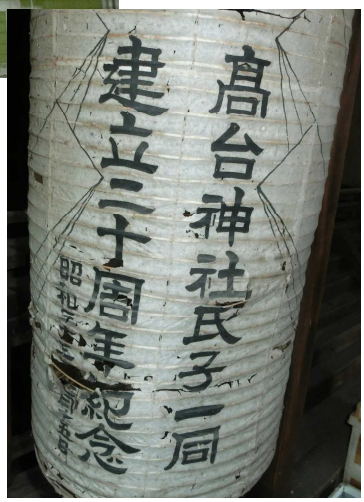
社殿は脚部分を撤去し、台座から上部分を建屋に収めています。経年による木部材のくすみはありますが、目立った痛みはなく大事にされてきたことが窺えます。

③神社幕

社殿台座の木箱に収められていた神社幕です。

写真の通り、「平成7年度（注:1995年）　氏子一同」の文字があり、氏子揃って奉納した

ことが分かります。神紋は巴紋の1つで「三つ巴紋」と呼ばれるものです。



④提灯

社殿正面の左右に「高台神社氏子一同　建立20周年記念　昭和33年7月15日」の文字入りの提灯が吊り下げられています。(注:1958年)

建立当時のものを、高台神社建立20周年の秋祭りを記念して買い換えたものと思われます。

⑤幟(のぼり)

幟は、高台神社建立30周年を記念して新たにあつらえたものと思われます。
「昭和45年4月11日　氏子一同奉納」と「天照皇大神」の大きな文字及び幟を製作した「旭川近藤染物工場」の文字入り幟です。(注:近藤染物工場は現存します)

他に、幟を掲揚するポールが2本あります。

⑥その他

イ.棚に「北海道新聞」朝刊の一部が3部ありました
　平成15年4月4日付
　平成16年4月4日付
　平成21年4月15日付
＊「春の神社祭」の時に使用
　(注:毎年4月に実施した証の1つ)

ロ.壁に年度ごとの担当世話役の組み合わせ表が貼ってあり、以下のことが分かりました…資料別紙
＊高台神社祭は、春・秋の2回行っていた
＊平成6年以降は春祭りのみの実施に変わった
＊平成7年から平成12年までは、田中・遠藤・安田・平川・加藤の5軒で祭りの世話役を輪番で担当して実施していた

5.「登位加」と「高台神社」の思い出を語る会での証言

高台神社の歴史をできるだけ細かく伝え残すため、茂内義雄氏に尽力を仰ぎ、かつて氏子だった方々を中心に連絡を取ってもらい、常呂図書館・端野図書館の協力を得、高台神社のことや旧登位加での思い出を語ってもらう場を設けました。

＊日時　令和4年（2022年）10月26日　＊会場　端野図書館
＊参加者（敬称略）10人
①前北 富男　（北見 昭和19年生まれ 78歳）
②田中 繁雄　（北見 昭和20年生まれ 77歳）
③茂内 信義　（北見 昭和19年生まれ 78歳）
④南 佐恵子　（北見 昭和15年生まれ 82歳）
⑤上西 美智子（北見 昭和15年生まれ 82歳）
⑦平川 君子　（端野 昭和17年生まれ 80歳）
⑧加藤 登貴雄（端野 昭和21年生まれ 76歳）
⑨茂内 正義　（常呂 昭和7年生まれ 90歳）
⑩茂内 義雄　（札幌市 昭和15年生まれ 82歳）
＊進行　加藤孝・茂内義雄
＊1つのことがらに複数の人が会話の形で加わっている場合は、一人ひとりの発言ではなく内容をまとめています。

(1) 高台神社最後の祭りについて

【加藤 登貴雄】
＊平成22年4月（2010年）に高台神社長老役だった安田光弘さんが亡くなり、4月15日の春祭りを妻の安田道子さんが代役として、その年の世話役を務めた。
＊平成23年4月（2011年）には、同じく長老役の田中政夫さんが亡くなり、安田・田中両家の奥さん同士で神社祭のこれからを相談した。
＊平成23年の段階で氏子として残っている遠藤熊吉・平川君子・加藤登貴雄3氏が神社をこのままにはしておけないので端野神社の宮司に相談し、平成24年4月（2012年）にお祓いをして魂抜きをしてもらった。
＊建屋ともども取り壊す話をしたが、その話がそのまま延びてあのままになり、現在に至っている。

注:「語る会」終了後、加藤・茂内が端野神社宮司:堀澤雅明氏宅を訪れ、この時のことを聞き取った。以下はその概要。

遠藤・平川・加藤の3氏から頼まれ、高台神社で感謝祭を終えた後、その場で魂抜きのお祓いをして、神社のお札のお焚き上げをした。社殿内部に納められていたお札には表に祭神・天照皇大神、裏には年月日入りの留辺蘂神社の文字があった。お札は留辺蘂神社から分社を示す正式なものではなかったので、留辺蘂神社へではなく、「元の場所へお帰りください」とお祈りをした。

（注:年月日の記憶は10年前のことなのでは覚えていないとのこと。また、神社祭のことを「感謝祭」と聞いていたとのこと）

(2)高台神社祭の思い出

【安田 道子】 ＊別途聞き取り:以下、安田分は同様

＊神社祭は、春(4月)と秋(9月)の2回行っていた。

＊祭りの世話役になると当番の人は自宅でお供え用の餅をつき、懇親会用のお酒やつまみなどの買い物をして用意をした。

＊神社にお参りをして、午前中お話をしたりお酒を飲んだりして半日を楽しんだ。

【加藤 登貴雄・安田 道子・平川 君子・茂内 正義】

＊父の代の時には氏子の家々を廻って二次会、三次会になることもあった。

＊祭りの時は一堂に会して話をする機会になっていた。

＊昭和30年代中頃、子どもがたくさんいた時は、子どもたちが神社にアメ玉やお菓子をもらいに来たと聞いている。

(注:昭和33年の高台神社創立20周年記念写真には、小学校低学年と思われる子どもたちがたくさんいるので、この時代なのかもしれません)

＊尋常小学校3年生、国民学校4年生の頃、神社境内で子どもや青年の相撲大会があったことを覚えている。(注:昭和15.16年頃)

＊青年団が祭りの協力をしていたと聞いたことがある。

(注:登青年団の結成は昭和25年。昭和34年の高台神社創立20周年の記念写真には青年団らしき青年の姿はないので、それ以降の時代と思われる)

(3)高台神社の思い出

【茂内 正義】

＊北登の国民学校(昭和16年:国民学校令)へ通うときには、高台神社で拝礼し、北登神社で拝礼し、学校の奉安殿でも拝礼と3回の拝礼をしていた。

(注:茂内正義さん所有の作文「学校の帰り道 昭和18年7月15日 北登国民学校初等科6年」の中に、「おとついの学校の帰り道でありました。高台の神社で〈ようはい〉をした時」という文があります) 注:ようはい:遥拝

(4)資料に記録されている「高台神社」と「高台付近」の情景・思い出

【茂内 義雄】

＊『さいはてのふだん記』90号に、「小学生の私は、遅い学校帰りなどにちょっぴり怖さもあって一目散に駆け抜けた神社の森だ」の一文があります。

＊『北登開拓記念碑建立 記念誌』(平成4年)に、「昭和22年4月でしたか。畑や藪や神社の森(今も残っているのが嬉しいね)、こうした中に踏み分け道が1本あるのでした」の一文があります。

(注:この時は北登小学校へ通学。6年生の時、昭和27年11月開校の登小学校第1期生として編入、翌昭和28年3月登小学校第1回卒業生。

昭和14年の高台神社建立時の写真には周囲に樹木はなく平らですが、10年以上の年月を経て木々に覆われた〈神社の森〉になっていったことが分かります)

【西山 恵祥】

＊北登小学校を昭和6年3月に卒業した西山氏が『北登開拓記念碑建立 記念誌』(平成4年)に寄せた文に、「吹雪の中を唯一人、高台(のぼり 注:登のこと)より、校舎の向かいの山からスキーで雪をくずして転げおりて登校」したことを綴っています。

【川森 力夫】

＊北登小学校を昭和15年3月に卒業した川森氏が『北登開拓記念碑建立 記念誌』に寄せた文に、「学校だけでなく、あの高台の通学路もすっかり様変わりして立派な台地となり、大農場の如き変革には驚くばかりで、たまに訪れても昔の面影は見当たらなくなってしまいました」と綴っています。

「高台神社」と「高台」の思い出を綴った資料、語ったことがらから年代によって違いがあることが分かります。

＊高台神社の建立に関わる経緯を知る人がいないこと。
現存する人たちが子どもの子どもの頃にはすでに高台神社があり、その当たり前のことを尋ねる必要はなかったことと、神社の建立と神事は戸主が関わることだったので、親子間で経緯が伝わる接点がなかったと思われます。

＊高台神社建立前の昭和初期から神社の場所は「高台」と呼ばれていたこと、。
高台神社の称号は、この場所の呼称から付けられたと考えるのが自然です。

＊昭和20年代、神社の前が登東部から北登小学校への通学路で、神社の森になっていたこと。
道路の整備・確保は、氏子となっている地域の人たちにとって、神社との行き来できる条件でもあったと考えられます。

＊昭和30年代の子どもがたくさんいたころには神社祭がにぎやかだったこと。
神社祭が戸主だけの神事ではなく、子どもを含めた地域の楽しいお祭りになっていったことが窺えます。

＊建屋建設時の経緯を知る人がいないこと。
理由は分かりませんが、建屋建設年代の昭和40年代半ば頃に戸主だった世代の人たちが、その後離農してこの地を離れたこと、農業を続けた人たちの世代交代によって、経緯を知る世代が欠落していったということも考えられます。

＊春・秋の2回の祭りを担当制で受け継いできたこと。
途中から年2回になることは考えにくいので、神社建立時から年2回（4月と9月）行っていたと思われます。このことは、豊作・豊穣を願い、収穫の感謝を祝うことにつながり、高台神社が土地神様に近い存在だったとも考えられます。

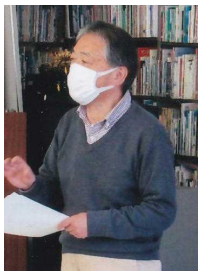
＊高台神社の最後の始末ができたことと神社の歴史が分かる資料が残り、証言を得ることができたこと。
地域の移り変わりによって神社を維持できなくなった時に、地域を見守ってきた神社にお礼を述べ、魂抜きを行うことができたのは、ひとえにその大役を果たした氏子の存在が大きいと言えます。

＊今回、茂内・加藤が建屋調査で確認した「神社幕・提灯・幟」は、この語る会で参加者に報告し、高台神社の貴重な資料として茂内が預かることの了承を得、可能ならば何らかの方法で保存できるよう検討することも併せて報告しました。

■写真で紹介「登位加と高台神社の思い出を語る会」の出席者　（敬称略）

加藤登貴雄・平川君子・上西美智子・南佐恵子

加藤孝



＊当日、都合により出席できなかった方々（敬称略）
安田道子（北見）・荒木武（端野）・遠藤熊吉（常呂）・佐藤純子（北見）

■高台神社資料

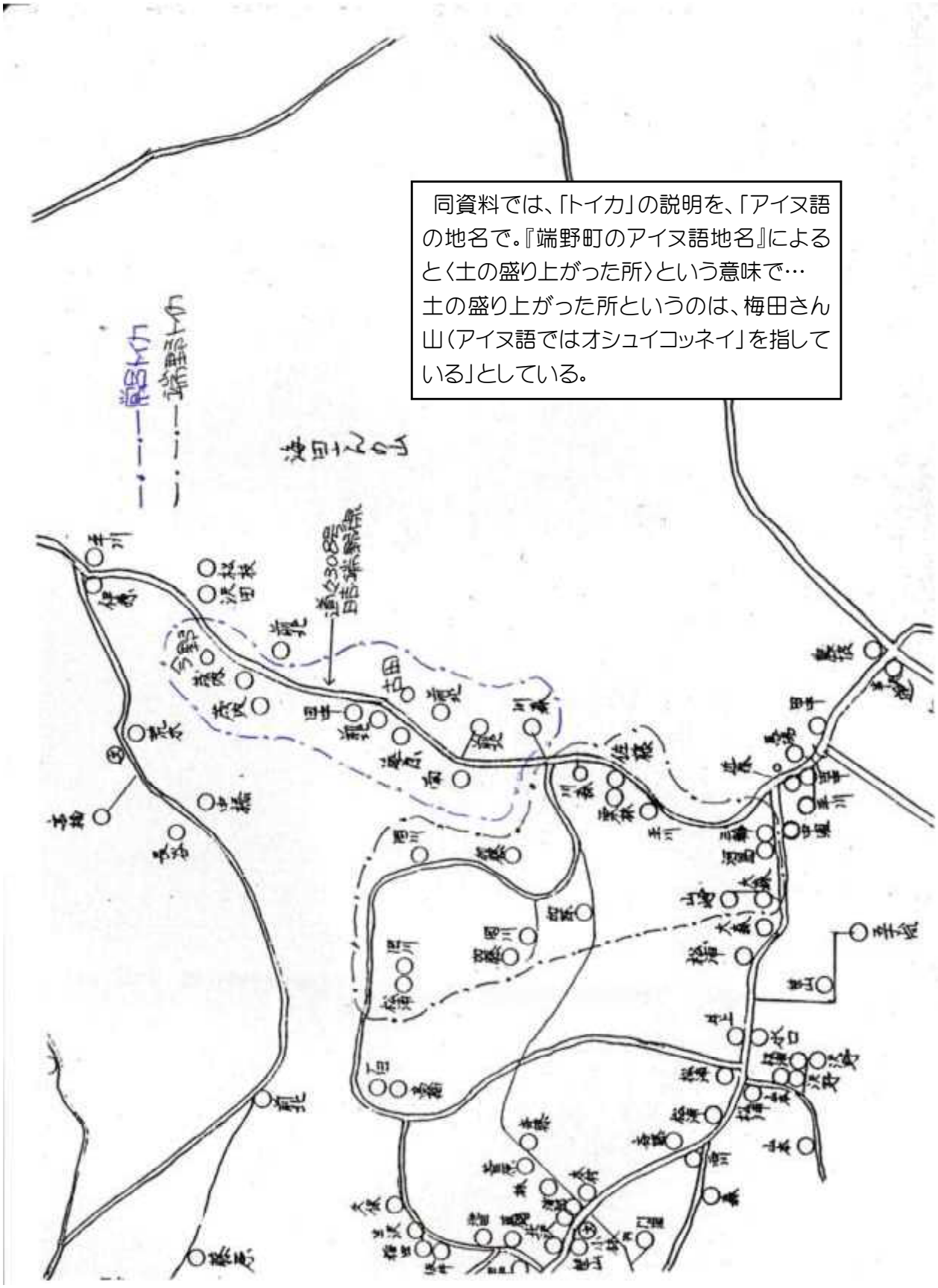
昭和33年　高台神社建立20周年記念

現在（令和4年 2022年）の高台神社建屋

正面（玄関）は南側を向き、斜面を見下ろす

建屋内部収納の社殿

「北登開拓祈念碑建立記念誌」（平成4年7月12日）発行から
＊昭和28年頃の北登と登一帯の戸別地図
＊当時の高台神社氏子の名前が判る囲み線は茂内義雄さんの手による



（登位加）高台神社の簡易年表

年月日（和暦・西暦）	内　　容
大正時代初期	現北登地区の中心部に氏神を祀る祠建立「登位加神社」の称号 ＊北登神社の発祥
大正15年（1926）	登位加が村境査定によって、端野村から常呂村に編入
昭和2年（1927）	町村道仁倉・隈川間、登位加・仁頃間道路完成
昭和3年5月（1927）	登165番地に社殿を造営。天照大神を奉上、登神社と称号 ＊昭和33年3月　登59番地:現在地に移社
昭和13年6月（1938）	端野村の字名改正　旧登位加地区が「北登」に改称
昭和14年（1939）	登位加高台に「高台神社」建立 ＊建立時の写真2枚 社殿の神社幕に「昭和14年吉日　川森房之助」の文字 北登1班・登東部の氏子が一緒に記念写真
昭和15年（1940）	紀元2600年記念として旧祠跡に北登神社を建立
昭和16年11月10日	常呂村の地番字名改正　登位加から登に改称 【茂内　正義】 ＊小学校3.4年生の頃（注:昭和15.16年頃）、高台神社祭で子ども・青年の奉納相撲があった。 ＊北登の小学校6年生の時（昭和18年）、学校へ通うときには高台神社で拝礼し、北登神社で拝礼し、学校の奉安殿で拝礼。3回の拝礼をしていた。
昭和27年（1952）	8月25日　登小学校上棟式 11月11日　登小学校開校式（1学級30人） ＊北登・登・日吉の一部が通学区域に ＊公的には1学級で、実質は1－3年生は新海光邦校長、4－6年生は三井康司教諭が担任の2学級（「登小学校開校20周年記念　あゆみ」掲載の山口則子さんの文、及び茂内義雄・南佐恵子両氏:同級生の記憶から） 【茂内　義雄】 ＊小学生の私は、遅い学校帰りなどにちょっぴり怖さもあって一目散に駆け抜けた神社の森だ。（注:登小学校開校前の北登小学校通学時代）

昭和28年（1953）	高台農道（迂回道路）開通
昭和33年7月15日（1958）	氏子一同名で「灯明（御神灯）」奉納 ＊高台神社建立20周年記念 ＊この時と思われる子どもたちと大人たちの記念写真 ＊昭和30年代中頃、子どもがたくさんいた時は、子どもたちが神社にアメ玉やお菓子をもらいに来たと聞いている。
昭和45年4月11日（1970）	氏子一同名で幟（天照皇大神）奉納 ＊高台神社建立30周年記念と思われる ＊建屋の建設年不明だが、この時の記念事業の可能性あり
昭和52年（1977）10月	国土地理院航空写真に高台神社建屋の屋根写り込み ＊これより前に建屋建設
平成　6年（1994）	神社祭を春・秋の2回から春の1回だけに変更
平成　7年（1995）	氏子一同名で「神社幕」奉納（木箱入り） ＊神紋は巴紋の1つで「三つ巴紋」
平成22年4月（2010）	高台神社長老役:安田光弘氏没 ＊4月15日の春祭りを安田道子さんが世話役代行
平成23年4月（2011）	高台神社長老役:田中政夫氏没 ＊安田・田中両家の奥さん同士で神社祭のこれからを相談
平成24年4月（2012）	加藤登貴雄・平川君子・遠藤熊吉3軒で最後の祭り 端野神社宮司:堀澤雅明氏によって魂抜きとお札のお焚き上げ
令和　4年6月（2022）	茂内義雄・加藤孝が高台神社建屋調査 ＊社殿・提灯・神社幕・幟を確認
10月	端野図書館で「登位加と高台神社の思い出を語る会」開催 ＊旧高台神社氏子ら関係者10人出席 ＊高台神社最後の祭り及び高台神社に関する多数の証言

高台神社祭世話役表　　＊建屋内の壁面貼り付けメモを編集

年（和暦・西暦）	春	秋
昭和62年（1987）	当　初 実　際　遠藤　安田	平川　遠藤
昭和63年（1988）	当　初　茂内　田中 実　際　安田　加藤	判読不明 茂内　田中
平成元年（1989）	当　初 実　際　平川　遠藤	茂内　田中 安田　加藤
平成 2年（1990）	当　初　加藤　安田 実　際　田中　茂内	遠藤　平川
平成 3年（1991）	当　初　遠藤　田中 実　際　安田　加藤	加藤　安田 茂内　田中
平成 4年（1992）	当　初 実　際　平川　遠藤	茂内　田中 安田　加藤
平成 5年（1993）	当　初　加藤　安田 実　際　茂内　田中	平川　遠藤
平成 6年（1994）	判読不明	
平成 7年（1995）	田中　遠藤	
平成 8年（1996）	安田　平川	
平成 9年（1997）	加藤　遠藤	
平成10年（1998）	安田　田中	
平成11年（1999）	平川　遠藤	
平成12年（2000）	安田　加藤	

※高台神社祭は、春・秋の2回行っていた
※平成6年以降は春祭りのみ実施
※平成7年から平成12年までは、
　田中・遠藤・安田・平川・加藤の5軒で
　祭りの世話役を輪番で担当して実施

■参考写真:昭和30年代後半の高台地区の雰囲気を知る手がかりに

茂内義雄氏所蔵写真:高台地区の農作業風景(昭和38年)

■参考資料:発行年は西暦表記

『常呂町史』(1969年)　『登小学校開校20周年記念　あゆみ』(1972年)
『常呂町百年史…山田秀三•村崎恭子「常呂町のアイヌ語地名調査」』(1989年)
『端野町史』(1965年)　　『北登開拓記念碑建立　記念誌』(1992年)
『ところ文庫14　常呂町の昔話…日吉の話』(1998年)
『さいはてのふだん記90号…茂内義雄「アイヌ語威名トイカ」』(2022年)
『95才　マサの歩み　茂内マサの長寿を祝う…高台地区の農作業』(1996年)

＊「登位加高台神社」は正式の名称ではありませんが、神社の地域性と歴史を振り返ると、今は使われない地名「登位加」こそが地域住民を1つにする源であり、かつこの地で暮らしを根付かせるシンボルであったことを思い、タイトルにしました。

編集•文責:加藤孝